

令和3年度オガサワラカワラヒワ保護増殖事業 川口氏ヒアリング結果

・日時：2021年12月9日（木）17:00～18:45 ※WEBにて実施

・出席者：

委員

川口 大朗 一般社団法人 Islands care 代表理事

環境省

杉山 昇司 環境省関東地方環境事務所野生生物課 取引監視係長(併任)希少生物係長

成田 智史 環境省小笠原自然保護官事務所 世界自然遺産調整専門官

いであ株式会社

谷口 裕紀 国土環境研究所自然環境保全部 主査研究員

小村 健人 国土環境研究所自然環境保全部 研究員

●保護増殖事業実施計画

数値目標について

- ・ 妥当な数字である。2011年以降大きな台風と干ばつが複数回発生したが、個体群は途絶しなかったため、2011年時点の個体数の約1.5倍である短期目標300個体に到達すれば、緊迫した状況から脱却できると考える。
- ・ 長期目標2,000個体に到達すれば、他の列島に自然と分布が拡大すると考えられる。ただし、ドブネズミやノネコの捕食圧といった脅威が取り除かれていることが前提条件である。
- ・ オガサワラカワラヒワは一度に複数の卵を産むため、繁殖がうまくいけば増加する可能性がある種である。そのため、2,000個体は実現困難な数字ではない。
- ・ 数値の基準としている2020年5月のラインセンサスについては、1996年に中村浩志氏が実施した調査範囲よりもかなり広い範囲を調査している。現在オガサワラカワラヒワは非常に低密度であるため、1996年のルートでは検出できない。
- ・ ラインセンサスは1島7時間程かけて実施した。モニタリング方法として正式に文書に記載するならば、各島3日間調査を実施し、平均で評価するのが本来ならば妥当。
- ・ ラインセンサスは2021年5月にも実施しており、2020年の調査ルートよりもさらに広い範囲を調査しているため、基準とするルートとしては2021年のものが好ましい。
- ・ 9月になると成鳥と幼鳥の判別が難しくなるため、繁殖個体数をモニタリングするためには4～5月に調査を実施することが適切。
- ・ 2011年の推定個体数は報告書によって数字が異なるので、元の報告書の数字を参照した方がいい。

PVAのパラメータについて

- ・ 年齢構成は足環標識調査の結果から算出できる。
- ・ 環境収容力については、オガサワラカワラヒワの個体数が増えて営巣密度がわかるようになれば数字の更新が可能となるだろう。

ラインセンサスについて

- ・ 観察者の技量によって結果が大きく変わる。
- ・ 現地では単純なラインセンサスではなく、出現頻度が高い場所とどまって重点的に観察をしている。
- ・ 2011年には「小笠原地域自然再生事業外来ほ乳類に関わる対策及び生態系モニタリング調査業務」（環境省）でスポットセンサスを実施している。その方法も参考になる。

センサーカメラ調査について

- ・ 足環の判別、雌雄や成鳥と幼鳥の割合等を確認するのに有効であり、毎年実施することで経年的な傾向をとらえることができる。
- ・ 現在林野庁で向島、姉島、妹島、姪島の各島6台ずつ、Islands Careで各島6台、平島に7台設置している。
- ・ 個体数密度が増えると現在利用されていない水場も利用されるようになると考えられるため、カメラの台数は個体数に応じて変更していけばよい。

- ・ 小笠原村が設置した平島の人工水場では、オガサワラカワラヒワの撮影頻度が高い。人工水場は繁殖の補助にもなる。
- ・ 現在センサーカメラは自然水場に設置しているが、水が枯れた場合に撮影頻度が下がる。人工水場で誘引してモニタリングすればそういったバイアスがかからなくなる。
- ・ 水場の位置は変化するため、実施計画ではセンサーカメラの細かい設置位置を規定しても意味がない。

#### 自主調査について

- ・ 助成金は1年単位であり、継続して獲得することは難しい。
- ・ 助成金の用途は備船費やカメラ代だけであり、人件費等は持ち出しである。
- ・ 長期的なモニタリングを民間だけで実施するのは負担が大きい。
- ・ 林野庁の事業では、母島属島で年間を通してセンサーカメラを稼働させている。春季と冬季に点検があるが、その間の夏季～秋季のメンテナンスを Islands care の自主調査時に実施している。カメラを良い状態に保つには、2～3ヶ月毎に点検が必要である。

#### 事業転換時の基準について

- ・ 50羽を下回るとおそらく個体を捕獲すること自体が難しくなるため、野生個体の全捕獲の基準は「繁殖個体数が50羽」で妥当だろう。
- ・ その他の基準についても妥当だが、事業終了後も3年か5年に一度のモニタリングは必要。

#### 実施する事業内容について

- ・ 実施主体に民間と記載しても問題ない。
- ・ 報告書には提供したデータ取得に使用した助成先の名称を記載してほしい。
- ・ 事業全体の評価に関わるモニタリングは、優先度を高めにしてほしい。現状はボランティアで行っている部分が大きい。
- ・ モニタリングの軸は行政が実施し、研究要素の強いものは研究者や民間が実施する体制が理想的。

#### 今年のおガサワラカワラヒワの生息状況について

- ・ 今年は幼鳥の割合が高く、繁殖成績が高かったと考えられる。
- ・ しかし、4月調査では個体の確認数が昨年より少なく、繁殖個体数は例年どおりか減少傾向である。
- ・ 今年生まれた幼鳥が来年繁殖すればよいが、決して楽観視はできない。

#### ドブネズミの営巣木への登攀防止対策の有効性について

- ・ 営巣場所のデータは少なく、現状では対策すべきエリアの絞り込みができない。
- ・ 近年はモクマオウの樹上のみで営巣が確認されているため、モクマオウの生育していない妹島、姪島では対策が難しい。
- ・ 対策エリアを絞るためには繁殖状況を十分モニタリングする必要がある。
- ・ 平島は面積が小さく、営巣できる場所も限られる。小規模な繁殖地から試験的に実施するのは有効であると考えられる。
- ・ 営巣木への登攀防止対策と人工水場を設置することにより、安全な営巣木に誘引し繁殖しやすくさせることが可能かもしれない。

以上